

シヤムの臣民形成に関する一考察

——ダムロン親王と国王像——

平成 18 年度入学

派遣先国：タイ

日向 伸介

キーワード：シヤム（タイ）、臣民、ダムロン親王、ラーマ五世王、親愛大王

対象とする問題の概要

東南アジア大陸部に位置するタイ（1932 年までの国号は「シヤム」）は、王制を維持する数少ない国の一つである。国民における現国王の人気は、概して非常に高い。この人気の直接の契機となったのは、国王の支持に独裁体制の正当性を求めたサリット政権（1959～63）といわれている。それでは、正当性の根拠として利用価値のある王権は、いつどうやって形成されたのだろうか。

今日、初等・中等教育で用いられている教科書の歴史観によれば、タイ人の王が支配した最初の国家は、13 世紀に興ったスコータイ王国である。以来、国王はいつの時代も指導者として国家の独立を守り、繁栄に導いてきたとされる。ところが、国王に対するこのようなイメージの構築・普及は、100 年ほど前までしか遡ることはできない。領域の確立、国王への権力集中、一律的な学校教育の導入などが、19 世紀末以降の出来事ではないからだ。

本研究は、タイで絶対王政の確立された 19 世紀末～1932 年、国王のイメージ構築に重要な役割を果たしたダムロン親王（1862～1943）に着目した。



ダムロン親王肖像

『シヤム王国博覧会記念』（1925）p.58

研究目的

本研究の目的は、ダムロン親王が、(1) どのようなシヤム国王像を提示しようとしたのか、(2) その目的は何であったのかを明らかにすることである。ダムロン親王をとりあげる理由は、シヤムの近代国家形成と絶対王政の確立に果たした政治的役割の大きさと、タイの為政者としては異例に多い著作のゆえである。ダムロン親王が積極的にシヤム国王像、特にラーマ五世王像の構築をはじめたのは、ラーマ六世王の治世（1910～1925）であった。タイ・ナショナリズムの始祖とされる六世王の思想は、先行研究で頻繁にとりあげられてきた。しかし、六世王よりもはるかに長い期間にわたり、シヤムの国王・国家・民族を定義し、専制体制護持のイデオログとして活躍したダムロン親王の思想に注目する研究は驚くほど少ない。本研究は、ダムロン親王の構築した国王像を丁寧に読み解き、その思想史的な位置づけを試みる。

フィールドワークから得られた知見について

今回の現地調査は、2007年2月～3月にかけて行なった前回の調査を補うものであった。すなわち、前回収集した資料をもとに博士予備論文を構想・執筆してゆく段階で、改めて必要となった資料を入手することを主な目的とした。

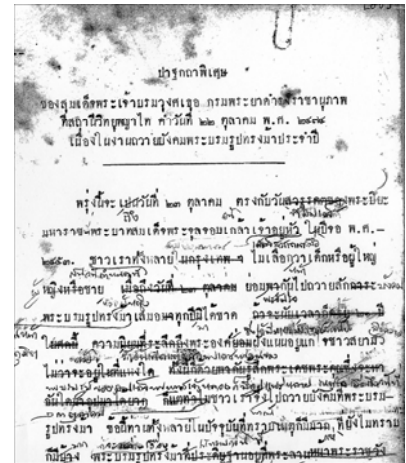
中でも、「親愛大王の偉業を示す年代記に関する演説」と題されたダムロン親王によるラジオ演説の原稿を入手したことは大きな収穫であった。「親愛大王 (piya-maharat)」とは「民に愛される国王」という意味の言葉であり、ダムロン親王が発案しラーマ五世王に献上した特別な呼称である。本研究では、「親愛大王」という概念を国王像構築の重要な手がかりとみなし議論の出発点とした。

ダムロン親王が五世王に対して特別な名前を献上する理由を、国家独立の維持や奴隷解放といった、ある種の「神話」に求めたことはすでに指摘されており、演説の部分的な内容は先行研究でも言及されている。しかし、国王の公的イメージ形成の最も基礎的な資料の一つとなるこの演説の全体像を把握することは、本研究にとって必要不可欠な作業である。

さらに、同資料該当番号のマイクロフィルムはなんと241ページにも及ぶことが判明した。一時間ほどの演説原稿がなぜそれ程大量かという点、ダムロン親王は、手書きの草稿を含め推敲に推敲を重ねていたからである。この点を指摘する研究は管見の限り認められない。公文書館員の言によると、原稿は関係者から乱雑な状態で寄贈されたものであるが、特に整理をされることなくそのまま番号を付されることになったという。そのためか、原稿の順序がしばしば入れ違っていることや、もとの場所が判然としない場合が多い。タイ語の肉筆に不慣れな筆者にとっては大変な作業となるだろうが、ダムロン親王がいかに国王のイメージを形成していったのか、その過程を根気強く読み解いてゆきたい。

今後の展開・反省点

今回の現地調査で新たに収集した資料を加え、2007年度提出予定の博士予備論文を完成させる。上記のように、臣民形成を主題とする本研究は、特にダムロン親王の思想に注目した。しかし、その後の博士論文の段階では、ダムロン親王のみをとりあげるのではなく、同時代の他の知識人がいかに国王と人々を定義づけていたのかを幅広く検討してゆきたいと考えている。



演説草稿の一部

タイ国立公文書館所蔵史料 [SB. 2. 21/13]



ダムロン親王図書館内（筆者撮影）